

## 2024年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏名
人間健康学部 人間健康学科	教授	松尾香弥子
最終学歴	学位	専門分野
お茶の水女子大学人間文化研究科人間発達学専攻 (博士課程)	博士(学術)	認知神経科学、神経イメージング、認知心理学

### I 教育活動

#### ○理念・目標・方針・計画(方法)

##### 【理念】

社会の中で自分も他者も活かせる人材の育成

##### 【目標】

社会に出た時に実際に役立つ知識・技術を伝える

##### 【方針】

双方向的でわかりやすい授業を行う

##### 【計画(方法)】

なるべく毎回、パワーポイント上にQRコードなどで問いへの回答サイトを提示して回答を求め、集計結果を即時に提示するといった、インタラクティブな授業を行う。学生の真面目な授業参加を促進する工夫を行う。学生の基礎的能力(視覚・聴覚判断や文章理解、タイピング等)を向上させる作業をできる範囲で取り入れる。

#### ○担当科目(前期・後期)

##### (前期)

専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ、教育心理学(教育・学校心理学) a および b、心理学実験Ⅰa および b  
オムニバス: 人間学概論・人間健康学

##### (後期)

専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、心理学実験Ⅱ、心理学研究法、学習・言語心理学、卒業研究  
オムニバス: 教職実践演習(中・高)、特別支援教育論(中・高)、特別支援教育論(幼・小)

#### ○教育方法の実践

- 教育心理学や心理学研究法、学習・言語心理学などにおいて、QRコードで無記名の簡易的なアンケートを行い、結果を即時提示することを随時行った。例:「頭がいいのは生まれつき(遺伝)だと思いますか、それとも、努力などの遺伝以外(環境)の影響だと思いますか」に対して、「(どちらかといえば)遺伝だと思う」「(どちらかといえば)環境だと思う」の二択で回答を求め、結果を円グラフで提示した。
- 教育心理学や学習・言語心理学、心理学実験などにおいて、ほぼ毎回タッチタイピングのトレーニングの時間を設け、タイピング技術の向上を促した。宿題を課して、提出について平常点に組み込んだ。
- 教育心理学および学習・言語心理学において、「コグトレ」を行った。基礎的な認知能力の向上を目指している。提出を出席確認のために使用した。また学習・言語心理学では宿題を課し、提出について平常点に組み込んだ。

- 教育心理学および学習・言語心理学などにおいて、授業途中に1回から数回程度 teams のワークを課し、出席確認および平常点として利用した。

○作成した教科書・教材

教科書等の作成はないが、毎回のパワーポイントにおいて、なるべく多くのスライドにイラストを入れて、わかりやすさを向上させるよう努力した。

○自己評価

上記の工夫が比較的よく作動したと思われる。今後、さらに洗練させていきたい。

## II 研究活動

○研究課題

- (1) 言語優位半球形成の仕組みの研究
- (2) 発達障害児・者の支援に関する研究

○目標・計画

【目標】

- (1) これまでに得ているデータを用いた論文を公刊する。また次の実験を実施するための環境整備を行う。
- (2) 発達障害関連の研究を開始する。

【計画】

- (1) 2つある大きな仮説のうちの第1番めについて、今年中に1本は公刊する。また、近隣の研究施設に連絡を取る。
- (2) 本学の学生を対象に、発達障害の教育実践に関する調査を行い、発表する。

○2017年4月から2025年3月の研究業績（特許等を含む）

(著書)

・なし

(学術論文)

1. Matsuo K, Kono K, Shimoda K, Kaji Y, Akiyama K, Reproducibility of the lateralization index in functional magnetic resonance imaging across language tasks. *Journal of Neurolinguistics* 57, 100943, 2021.2.
2. Inoue J, Matsuo K, Iwabuchi T, Takehara, Y, Yamasue, H, How memory switches brain responses of patients with posttraumatic stress disorder. *Cerebral Cortex Communications* 2(2), tgab021, 2021.3.20. (松尾は co-first および co-corresponding author)
3. Matsuo K, Kono K, Ysui-Furukori N, Shimoda K, Kaji Y, Akiyama K, HomotopicLI: Rationale, characteristics, and implications of a new threshold-free lateralization index of functional magnetic resonance imaging. *Laterality* 27(5), 513-543, 2022.7.
4. Matsuo K, Ysui-Furukori N, Shimoda K, Kaji Y, Akiyama K, Concordance of lateralization index for brain asymmetry applied to identify a reliable language task. *Symmetry* 15(1), 193, 2023.1.9. <https://doi.org/10.3390/sym15010193>
5. 松尾香弥子, 大学における発達障害の授業実践-自己評価の授業前後比較. 東邦学誌 (投稿中)

(学会発表)

1. Matsuo K, Altered auditory substrates observed in auditory verbal hallucination. Poster presentation #1457. Neuroscience 2017, Washington, D.C., USA, 2017.11.
2. Matsuo K, Auditory system altered in auditory verbal hallucination studied using diffusion spectrum imaging, T1-weighted image and fMRI. Poster presentation #1819. Joint Annual Meeting ISMRM-ESMRMB 2018 (International Society for Magnetic Resonance in Medicine), Paris, France, 2018.6.
3. Matsuo K, Akiyama K, Kaji Y, Which lateralization index and which language task should we use in lateralization test? Digital poster presentation #3918. ISMRM (International Society for Magnetic Resonance in Medicine) 27th Annual Meeting & Exhibition, Montreal, Canada, 2019.5.
4. Matsuo K, Inoue J, Iwabuchi T, Yamasue H, Negative correlations of brain activation between daily recognition and trauma memory remembering in PTSD. Digital poster presentation #3905. ISMRM (International Society for Magnetic Resonance in Medicine) 28th Annual Meeting & Exhibition, virtual meeting, 2020.8.
5. Matsuo K, Yau-Furukori N, Shimoda K, Kaji Y, Akiyama K, Neural fiber “conductivity” elucidates a mechanism of language lateralization. Poster presentation (digital) P886.02. Neuroscience 2021, virtual 2021.11.8-11 (in-person Chicago, USA, 2021.11.13-16).
6. Matsuo K, Yau-Furukori N, Shimoda K, Kaji Y, Akiyama K, Concordance of lateralization index for hemispheric asymmetry to find a reliable language task. Poster presentation (digital virtual presentation) 241.10. Neuroscience 2022, 2022.11.12-16. (Nov. 13, 2022, 1:00 PM-5:00 PM) (in-person San Diego, California, USA).
7. 松尾香弥子, 「幻聴のある患者の聴覚皮質と聴放線：fMRI、構造画像および拡散スペクトラム画像による灰白質と白質の計測」, 日本磁気共鳴医学会雑誌, 37, S176 (O1-16, 口頭発表), 第45回日本磁気共鳴医学会大会, 宇都宮, 2017.9.
8. 松尾香弥子, 「幻聴の神経基盤：MRI 研究」, 第39回日本生物学的精神医学会・第47回日本神経精神薬理学会合同年会 (P-139, ポスター発表), 札幌, 2017.9.
9. 松尾香弥子, 藤井久彌子, 尾関祐二, 下田和孝, 高野賢太, 楫靖, 秋山一文, 「fMRI のラテラルリティ指標が言語課題間でどのくらい一致するか」, 第40回日本生物学的精神医学会・第61回日本神経化学学会合同年会 (P7-2, ポスター発表), 神戸, 2018.9.
10. 松尾香弥子, 秋山一文, 楫靖, 「fMRI の側性化指標の言語課題間における一致度」, 第46回日本磁気共鳴医学会大会 (PDF-002, PDF ポスター発表), 金沢, 2018.9.
11. 松尾香弥子, 楫靖, 秋山一文, 「HomotopicLI: 新しい fMRI ラテラルリティ指標の開発」, 第41回日本生物学的精神医学会 (O-25, 口頭発表), 新潟, 2019.6.
12. 松尾香弥子, 楫靖, 秋山一文, 古郡則雄, 下田和孝, 「新しい側性化指標 HomotopicLI の検証：右半球優位検出における特異性」, 第42回日本生物学的精神医学会 (O1-2, 口頭発表), バーチャルミーティング (仙台), 2020.8.
13. 松尾香弥子, 古郡則雄, 下田和孝, 楫靖, 秋山一文, 「神経線維の「伝達度」により言語側性化の仕組みに迫る」, 第43回日本生物学的精神医学会・第51回日本神経精神薬理学会合同年会 (P1-26, ポスター発表), 京都・オンライン, 2021.7.
14. 松尾香弥子, 古郡則雄, 下田和孝, 楫靖, 秋山一文, 「言語優位半球判定のための信頼できる言語課題を側性化指標の一致度によって評価する」, 第44回日本生物学的精神医学会・4学会合同年会, 東京・オンライン, 2022.11.4-6.

(特許)

(その他)

なし

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

科学研究費助成事業・基盤研究(C)「言語処理の両側化現象－精神疾患ではなぜ脳の両半球で言語が処理されるのか」(2020年度 20K07951)につき、新型コロナウイルス感染症のために2年延長することができ、本年度(2024年度)で終了となった。残額を英語論文の校正費に使用したが、期日までに執筆を終了できず、返還することとなった。今後、次の科研費申請を行っていききたい。

○所属学会

日本磁気共鳴医学会、日本心理学会、日本生物学的精神医学会、International Society for Magnetic Resonance in Medicine、Society for Neuroscience

○自己評価

日々の業務、とくに授業の準備や成績評価に時間をかけてしまい、また通院もあり、本年度もあまり研究活動を行うことができなかった。しかしながら、2月の後期成績評価終了後、論文執筆に復帰することができた。仕上げることはできなかったが、今後、完成へと進んでいきたい。また、授業中に学生から取得したデータを用い、発達障害についての論文を書き、東邦学誌に投稿することができた。今後、別のテーマで同様に投稿をしていきたいと考えている。

III 大学運営

○目標・計画

【目標】

担当業務を全うする。

【計画】

所属委員会をもり立てながら、自分のできることを工夫し、さらに貢献する。

○学内委員等

保健・学生相談センター運営委員会、教職支援センター運営委員会・同人間健康学部部会

○自己評価

業務内容をようやく把握しつつある。今後、さらに貢献していきたい。

IV 社会貢献

○目標・計画

【目標】

名古屋地域についてさらに理解を深める。

【計画】

観光地や史跡を訪れて実際を知る。また名古屋に特に関係のある歴史について学ぶ。

○学会活動等

とくになし。

○地域連携・社会貢献等

とくになし。

○自己評価

通院の際に近隣の観光名所等に寄ることができた。今後、さらに研鑽していきたい。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

体力向上のため、週に1回程度、平和公園を散歩する。月に1回程度、中程度の負荷のスポーツに参加する。

VI 総括

着任して以降、ほとんどまったく研究活動をできなかったが、本年度の最後によりやく復帰の端緒を得た。今後、少しずつでも研究活動を継続していきたい。具体的には、論文を仕上げることと、国内学会に参加すること、また、新しい計測・データ取得をできるように調整することである。体調がまだ万全ではないので、健康第一にやっていきたい。授業については、1年目と比較して、2年目となる本年はかなりスムーズにできるようになった。今後も工夫を重ねていきたいと考えている。

以 上